

氏 名	島 村 昇 しま むら のぼる
学位の種類	工 学 博 士
学位記番号	論 工 博 第1277号
学位授与の日付	昭 和 55 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	住空間の歴史性・風土性に関する建築計画的研究

論文調査委員 (主 査)
教 授 巽 和 夫 教 授 川 上 貢 教 授 西 川 幸 治

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、住宅計画原理の一側面である歴史性及び風土性に着目し、それらが住空間の各部面に及ぼしている実体性を究明したものである。研究対象として主に近世城下町を起源とする北陸地方都市金沢をとりあげている。

論文は、序章、4章、及び結章から構成されている。序章では、本研究の意図、従来の研究との関連、研究の方法と構成について述べている。

第1章においては、住空間の歴史性・風土性を概括的にとらえるために、全国46地域の住空間量を検討している。各地域の住空間量はきわめて大きな差をもって分布するが、この空間量の大小は、社会的因子と風土的因子との影響力の強弱によって決定されている。都市化の進行した地域においては、社会的因子が優勢で住空間量は小さく、都市化の弱い地域では風土的因子が優勢で北方系住居の大型性、南方系住居の小型性が明確であるとしている。また、住空間の内容をリビング系空間とサービス系空間とに分けた場合の両者への空間配分量にも風土性が貫かれていることを述べている。

第2章では、住空間の歴史的発展の過程を、金沢をモデルケースとして具体的に考察している。まず、現代住宅にまで影響を及ぼしている近世住宅の成立背景を概観し、次いで、近世、明治初期の武家・農家・町家を具体的例証を通してその内容を分析し、近代以降の住空間型の原型として設定している。住空間型の原型が、近代住宅にいかに関承され変容するかをみるため、金沢市街域の一戸建木造住宅の実態調査が行われている。近代の住空間型が原型住空間と異なる最も大きな相違点として、ドマ空間の外化分離・前面配置が挙げられ、その状況と理由が考察されている。また、各住空間型の構成部分の空間量を比較検討することによって住空間型を貫く風土性を論証している。

第3章では、ドマ空間の外化分離傾向の明瞭な町家系住居をとりあげ、その歴史的発展過程をひとつの風土化の過程としてとらえて跡づけている。その方法として、風土化の結果として現われる完成期加賀町家を、その規範となった京町家と比較検討することによって同一住居種異地域間比較を試みている。両町家の比較に際して、①住空間の構成、②住空間量、③住空間の装置類の3つの視点をとおしている。

第4章では、住空間の歴史性と風土性が現代にいかに関承されて変容しているかを分析し、その住生活への影響や問題点を明らかにしている。まず、住宅統計調査結果から、金沢市における住宅の現状の概要を把握したうえで、市街地の一戸建住宅と新興住宅地の建売分譲住宅を対象とする実態調査を行い、両者の比較検討を通じて現代の住空間型系列や住空間量の継承性や動向を分析し、現代の住空間が、ドマの内部化と量的削減を特徴とし、風土的な住空間構成原理を喪失していること、その結果、住生活の健全な展開が阻害されていることを論じている。

結章では、本研究によって得られた成果を整理・要約するとともに、住宅計画上に若干の提言を行っている。

論文審査の結果の要旨

住宅は、地域の住生活上の要求に応じ、土地に結びつけて建設されるという性質から、必然的に歴史性や風土性を帯びている。近来、歴史性・風土性は住宅計画原理の一側面として重要視されてきている。従来、地域における住空間の特質に関しては、建築史学のなかの民家研究に一定の成果があるが、それは主として農家を対象とするものであり、地域における各種の住居種について、それらを歴史的・風土的所産として建築計画的視点から追求したものはみられない。

本論文は、旧城下町としての歴史性を有し、また寒冷多雪の北陸の風土性のもとにある金沢をモデルケースとして、近世から現代に至る約400年にわたる各種住居種を研究対象とし、そこに形成されてきた住空間の歴史性・風土性を計画原理として抽出し体系づけを行ったものである。得られた成果の主なものは次の通りである。

(1) 住空間の歴史性が住空間の型とその系列に実体化されているとの見解から、近世住居の比較研究を行っている。この結果、武家系、農家系、町家系の3住居種の住空間構成上の決定的な差異が、ゲンカン、ドマ、オエの3者の組合せ方の差異によっているという事実を見出し、それぞれ、G型、D型、T型と名付けて、住空間型をこれら3原型の継承・変容過程としてとらえると、継承性は、G型が安定的、D型が発展的、T型が衰退的であることを明らかにするとともに、3原型のそれぞれの特色を合成した新たな住空間型が発生し発展してきた経緯を述べている。ドマ空間の外化分離は、陰うつな北陸の風土に対してサービス系空間の日照・採光・排煙・通風・換気・除湿等の諸性能を高め、そのことによってリビング系空間の快適な生活展開を可能にしようとする建築空間的処置であり、ドマ空間の前面配置は、特に多雪時の出入、街路とドマ空間の接近性による生活利便性の向上を意図する住空間の近代的合理化であることを明らかにしている。

(2) 住空間の風土性が住空間の量(住宅規模)を指標としてとらえることを統計的に実証し、北方系広間型ドマ住居と南方系田字型小ドマ住居を風土性に見地から位置づけた。また、住空間の内容をリビング系空間とサービス系空間とに分けた場合の両者への空間配分量にも風土性が貫かれていることを論証している。住空間の風土性をいっそう明瞭に抽出するため、加賀町家と京町家とを対象として同一住居種の異地域間比較を行っている。加賀町家の風土化過程はひとつの歴史的過程であるところから、その発展過程を、初期、形成期、成立期、完成期の約300年間にわたって追跡し、ドマ空間の拡大過程と外化分離

過程を明らかにしている。加賀町家は京町家に比べて住空間が大きく、また耐風雪装置、採光装置が発達しているが、これらが風土的適応の所産であることを論じている。

(3) 住空間の歴史性が現代にいかに関承され変容しているかを追求し、住空間の型においてはかなりの継承性が認められるものの、住空間量の減少がドマ空間の量的削減と内部化の傾向を助長し、サービス系空間の機能性を著しく阻害していることを論証している。そしてこのことが、オエ空間を主対象とした現代的な住宅計画原理の風土的矛盾であると結論づけている。

以上要するに本論文は、住空間の歴史性・風土性を建築計画的視点から追求し、合理性・普遍性を重んずる従来の計画原理に対して新たな側面を拓いたもので、学術上・實際上寄与するところが少くない。

よって、本論文は工学博士の学位論文として価値あるものと認める。